

なかよし広場における日本鶏飼育について

五十嵐 真由美

(横浜市立野毛山動物園)

野毛山動物園では、かつて多くの日本鶏を飼育し、教育普及活動にも積極的に活用してきた。しかし近年、万騎が原ちびっこ動物園の委託化や「なかよし広場」における鳥インフルエンザ対策の強化により、その飼育数は大幅に減少している。

日本鶏は、江戸時代までに持ち込まれ、改良・固定化された日本固有の文化遺産であり、34品種のうち17品種が天然記念物に指定されている。野毛山動物園は歴史的にも日本鶏の飼育に力を入れてきたが、近年は鳥インフルエンザの発生状況やアニマルウェルフェアの観点から、繁殖や淘汰を含む継代飼育が難しくなっている。

かつては、ヒヨコのふれあい、卵の観察、ふ化イベント、餌による卵黄の色の変化など、鶏を活用した教育普及活動が盛んに行われ、参加者の継続的な来園にもつながっていた。しかし、鳥インフルエンザの国内発生件数の増加や、動物園での発生事例を踏まえると、鶏の飼育は防疫上のリスクが高く、万一発生した場合には家畜伝染病予防法により全処分となる可能性がある。

日本鶏の保存は、文化財の継承や遺伝資源の保全の観点から重要であり、国内では大学や一部の動物園、日本鶏保存会が飼育・保護に取り組んでいる。しかし、動物園が博物館として日本鶏を継代飼育するためには、防疫対策の強化、隔離展示施設の整備、淘汰を行えないことによる飼育負担の増大など、多くの課題が存在する。日本鶏の文化的価値を伝えつつ、動物園としてどのように飼育を継続すべきか、今後の方向性を考える必要がある。